妖怪退治屋とその手下

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖怪退治屋とその手下

【Ｎコード】
Ｎ０１３７Ｎ

【作者名】
Ｒａｉｌ

【あらすじ】
　拝地正巳はごくごく普通の中学生だったが、夏休みの初日に妖怪退治屋の梨緒と出会ったことにより大きな転機を迎える。自らの失敗で梨緒に命を助けてもらった正巳は、半強制的に梨緒の妖怪退治屋稼業を手伝うことになったのだった。
　苦労症の少年が妖怪退治屋の仕事を通して色々学ぶ話。

プロローグ（前書き）

以前書いた小説をちょこちょこ手直ししながらＵＰします。基本ギャグ路線ですので、楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

　僕は力なく受話器を下ろし電話ボックス出ると、そのまま近くにあったベンチに腰を下ろした。ぼんやりと目の前にある池を眺める。
　僕が今いる公園の名前にもなっているまん丸池は真夏の太陽の日差しを乱反射してキラキラ輝いている。そのまぶしさに思わず目を細めた。子供たちのはしゃぐ声が聞こえる。現在の時刻は十時。平日だし、普段ならこれほど公園の中に子供がいることはない。昨日から市内の小中学校は夏休みに入ったのだ。市立の中学校に在籍している僕ももちろん例外ではない。
　本来なら今日、僕はこの公園で待ち合わせて友達と遊びに行くはずだった。が、一向に友達が来ないので公衆電話を探して電話を掛けてみたのだ。
　その結果、
『家族で軽井沢に旅行に行ってるので、ただいま留守にしておりまーす！』
　という、友達のお母さんのはしゃいだ留守番メッセージを聞かされた。多分、というか絶対に友達は僕との約束を忘れて旅行に行っているに違いない。ひどい、なんて友達甲斐のない奴だ。きっと今頃軽井沢で白いワンピースを着た麦わら帽子の女の子と知り合いになったりしてるに違いない。羨ましい。お土産を買ってきてくれなきゃ絶対許してやらないぞ。
　日向にあるベンチに座っていたため、肌がジリジリと焼かれるようだ。汗が噴き出してくる。
　そもそもケータイを持っていない僕は公衆電話を探すために暑い中あちこち歩き回ったので結構疲れている。もう歩くの面倒だし帰ろうかなぁ。手持ちのお金も電話をかけるのに使ってしまって、ガリガリ君すら買う余裕がない。
　クーラーのきいた室内が恋しくなった僕は家に帰ることを三秒で

決意した。
　どうせなら少しでも涼しいところを通って帰ろう。そう思った僕は、公園の中でもあまり人の通らない林道を通って帰ることにした。
　それが僕、拝地正巳（はいちまさみ）の大きな転機になるなんて、この時は露ほども思っちゃいなかった。

ことの発端　1

うだるような暑さに汗が肌を伝う。暑さというのはどうしてこうも人の思考力を奪うのだろうか。多少日陰に入ったところでむっとする熱気が冷めるわけでなし、体内の熱が一気に発散する機械とかないかなと本気で思う。誰か開発してほしい。そしたら夏にぼんやりする時間が減って有意義に過ごせると思うのだ。

とまあ屁理屈を脳内でこねながら僕は歩いていた。

友達からも良く注意をされているんだけど、僕は考え事をしているときにぼーっとする癖があるらしい。

この時も例によって例のごとく、僕は考え事に没頭していたせいでぼんやりとしていた。

そのため、やけに真剣な表情で全力疾走してくる女性を上手く避けることができなかったのだ。

足元を何か茶色いものがすりぬけたと思った次の瞬間には、僕は真正面から女性のタックルを受けた。

「うわっ！」

突然の衝撃に僕は尻もちをついた。相手の女性も同様のようで、林道の石畳の上で尻もちをついている。

突然のことに頭がついていけず呆然としている僕よりも早く女性は立ちあがり、きっとこちらを睨みつけた。

「坊主！　どこ見て歩いとんねん！　あんたのせいで見失ったやんか！」

「えっと……すいません？」

僕がとりあえず謝ると、女性はイラついた様子でこちらを睨んできた。結構な迫力だ。僕は若干引きつり気味だが笑顔で返す。

ぶつかったのはそこそこ若い女性。多分、二十代中頃だろう。どことなくかっこいい顔立ちだ。ショートカットの明るい栗色の髪に、空色のＴシャツにジーンズ。靴は何度かホームセンターで見かけた

ことのある安全靴とかいう靴だ。手にはワイヤー、腰の革ベルトには鞘に入ったナイフっぽいものと特殊警棒みたいなのが差さっていた。大きめのウエストポーチはパンパンに膨れていて、色々なものが入っているのだと思われる。
……この人、今からサバイバルレースにでも行くのだろうか。よく職務質問に引っかからなかったなぁ。特に腰の武器。
しばらく僕を睨みつけていた女性だったけれども、やがて一つため息をついた頭を掻いた。
「悪い、坊主。八つ当たりや。うちもちゃんと前見て走ってなかった」
意外に常識人なのかもしれない。それともこれは関西人によく見られるノリ突っ込みとかいう奴なのだろうか。
なんにせよ、滅多な時以外は女性に逆らっても得はない。
「いえ、気にしないでください。えっと、随分お急ぎのようでしたけど、どうかしたんですか？　僕でよければお手伝いしますけど」
僕が立ちあがりながら言うと、女性はまるで珍獣でも見るかのような目で僕を見ていた。
僕の顔に何かついているのだろうか。
首を傾げていると、女性はどこかばつが悪そうな顔をした。
「自分、お人好しって言われへん？」
「自分って、僕、ですか？　えっと、時々言われますけど」
それがどうかしたんだろうか。
僕は女性の言葉を待ったが、彼女はその続きを口にすることはなかった。
女性は頭を一つ振ると、打って変わって真面目な顔になった。
「手伝ってくれるっちゅうんなら是非手伝ってほしいねんけど、ええか？」
もしかして結構大変なことなんだろうか。よく考えてみれば、いい年をした大人が昼間っから全力疾走しているのもおかしな話だ。が、男に二言はないのだ。

「ええ、大丈夫ですよ。なんですか？」
　僕が答えると、女性は一つうなずいた。
「うちが追いかけてた動物を探してほしいねん。これぐらいの大きさで、狐みたいな見かけや。今は怪我してるからそう遠くへは行ってへんはずや」
「へぇ。逃げたペットでも追いかけてたんですか？」
　怪我をしているとはよろしくない。早く見つけて手当てしてあげないと。
「んー、まあそんな所や。ああ、そや、見つけたらなるべく大きい声でうちを呼んでほしい。引っ掻かれるかもしれんからくれぐれも自分で捕まえたりしぃひんようにな」
　女性は特に最後のところを強調した。やっぱり手負いの獣って凶暴になるって言うもんね。
「分かりました。とりあえずこの辺探してみますね」
「頼んだで」
　女性は言下に駆けだして行った。
　さて。僕も捜索を始めよう。
　あちこち覗きこんだりしながら僕は歩き始めた。
　僕の幼馴染の猫もよく脱走して、それを見つけ出すのはいつも僕だった。動物を見つけ出すのは得意な方だと思う。
　そういえばあの人、狐みたいな動物って言っていたけど、ホントは何の動物なんだろう。アライグマとかレッサーパンダとか？　大きさ的には猫とか犬くらいだけど、随分としなやかに動いていた気がするし、猫なんだろうか。猫ならば木の上にも注意を払わなくてはいけない。
　あちこち注意しながら林の中をひたすら歩いたのだった。

ことの発端　2

十分も探していただろうか。いくら木の葉のせいで直射日光が遮られている林の中だって、真夏なのだ。暑い。右も左も後ろも前も、それに上も下もとあちこち見ているのですっかり首が疲れてしまった。

そんな僕の目に、座り心地の良さそうな切り株が映った。形といい、大きさといい、高さといい、まるで僕に座ってほしいと言わんばかりの切り株だ。切り株さんだって僕が座ったら喜ぶに違いない。人間、休息も大事だ。

僕は切り株に近付く。何やら端っこの方に藁束みたいなのがあるが、まあいいや。クッションクッション。

「よっこいしょっと」

おじさん臭いとは分かっていても声が出てしまうのだからしょうがない。僕も歳をとったなぁ。って言っても、まだ十五歳だけどね。

と、

「フギャァァァァァ！」

突然、僕のすぐ後ろで唸り声が響いた。

僕は驚いて立ちあがろうとした。が、慌てたせいでバランスを崩し、そのまま後ろに倒れ込んでしまった。木の葉の間から入道雲が目に映る。げ、まずい。

「うわぁ！」

僕は間抜けな悲鳴を上げた。痛みを予想して体をぎゅっと縮まらせる。

が、予想していたような痛みはなかった。確かに切り株に打ち付けた足はちょっとだけ痛いけど、地面に直撃したはずの背中に柔らかい感触がある。

「あ、れ？」
何か下敷きにしてるような気がする。何だろう。
僕が恐る恐る起き上がろうとすると、
「坊主！　無事か！？」
先ほどの女性が血相を変えて茂みから飛び出してきた。よほど急いで来たらしい。あちこち葉っぱがついているし、枝で切ったのか肌にいくつか切り傷ができている。
僕はとてつもなく申し訳ない気分になった。
「すいません、転んだだけです……」
我ながら間抜けな格好での謝罪だ。
女性は僕を見て一瞬安心したような表情になった。
が、それは本当に一瞬で、僕が下敷きにしている何かを見てさっと表情を変えた。
びっくりするぐらい俊敏に僕に近付いてきた女性は、そのまま僕の体の下にあるそれをひっつかみ、空いてる手を僕の体の下に差し入れて勢いよく跳ねあげた。
当然僕は勢いよくひっくり返るわけで。
「もがっ」
地面さんこんにちは。
まさか人間なのにちゃぶ台返しされるとは思わなかった。
「何するんですか、いきなり」
僕は不満を鳴らしてみたが、女性には聞こえていないようだ。
彼女は僕が押しつぶしてしまったもの、狐っぽい動物の尻尾を握っていた。僕がクッション扱いしたのは彼の（もしくは彼女の）尻尾だったらしい。それであの悲鳴なわけだ。その上その後転んだ僕は本体を下敷きにしてしまったということだろうごめんね、狐さん。
「坊主、でかした！　お手柄や！」
女性はさっきの顔とは打って変わって上機嫌だ。
「ようやく捕まえたで。覚悟しぃや」
言いながら、女性はウエストポーチからワイヤを取り出していた。

そしてそれであっという間に捕まえた狐を縛り上げてしまった。片手だけでやってのけたのだから、いやはやすごいものだ。
しかし尻尾を掴まれて逆さづりにされた狐はキュウキュウと悲痛な鳴き声を上げている。女性は全く意に介していないようだ。
僕はその痛々しい様子に顔をしかめた。狐のつぶらな瞳が僕に向けられる。潤んだ目がまるで僕に助けを求めているように見えた。
「止めて下さいよ、痛がってるじゃないですか。可哀想です。怪我してるんでしょう？」
僕が声を掛けると、女性はむっとした顔で僕を睨んできた。
「痛がってるからって手加減したらまた逃がすかもしれへんやろ。そしたら被害が増えるだけや」
「でもワイヤーで縛るなんて……！」
女性はにべもない。
「その必要があるからそうしてんねや」
「でも怯えてるじゃないですか。それに僕が見つけたんですから」
それでも僕が食い下がると、女性は深々とため息をついた。
「見つけたからってあんたのものになるわけちゃうやろ。それに見た目に騙されたらあかんで。こいつはなぁ――痛っ！」
女性が顔をゆがめる。狐が自分を掴む女性の腕に噛みついたのだ。
痛みに耐えきれなかったのか女性が手を離すと、狐は空中でくるりと回転して地面に降り立った。その足元にはいつの間にか噛み切られたワイヤーが散らばっている。
視界の端に常に映っていると思っていたけれど、いつ噛み切ったんだ？　っていうか、そもそもワイヤーって神切れるものなのか！？
狐は茂みに逃げ込もうとしたのだが、それを遮るようにワイヤが唸る。
「逃がすか！」
女性は無事な左手でワイヤの切れ端を鞭のように振るった。しかし狐はそれをさらりとかわすと、さっさと茂みの中に消えて行ったのだった。

「ちょっと待てやコラ！」
女性は獲物を追いかけて走っていく。彼女が怪我をしたのは僕のせいだし、後味が悪い。せめて彼女が傷の手当てをするまで協力しよう。
またかくれんぼに突入だろうか。
そう思って僕が追いかけようとした矢先、女性が恐ろしい顔で茂みから飛び出してきた。再び僕とぶつかる。
「うわ」
「ぎゃ」
彼女の悲鳴は後者である。
女性は痛みに顔をしかめていたが、すぐに体勢を立て直した。そしてやおら僕の肩をがっしり掴む。
「坊主、今すぐ逃げぇ。アカン、ヤバいわ。ぼさっとしょったら食われるで！」
一体何のことかさっぱりだ。
僕がキョトンとしていると、女性が飛び出してきた方向の茂みがガサガサと揺れる音がした。女性の体がぎくりと強張る。
僕が相変わらずボケっとしていることに焦れたのか、女性は僕の顔を掴んで強制的に自分のやってきた方向に向けた。ぐきりと嫌な音がする。痛い。
なんて暢気なことを言ってられない事態が目の前で展開していた。
僕は思わず絶句した。
茂みからのっそりと姿を現したのは、狐色の毛玉。その色香たちは先ほど逃げ出した狐によく似ている。
しかしそれは鋭い牙をもち、全長が二メートルほどもある巨大な生き物だったのだ。

ことの発端　3（前書き）

ちょっとだけ流血表現あり。あと動物虐待を推奨してるわけではありません。あしからず。

巨大狐もどきが歩くと、柔らかな地面にくっきりと足跡が残った。
「なんですか、あれ……」
喉がカラカラに乾いていて喋りづらい。目の前に現れた動物の威圧感に委縮してしまいそうだ。
「あんたがさっき変に情け掛けたせいで逃げた奴や！」
女性が怒鳴る。確かにさっき逃げた狐と似ている。似てるけど、
「あれ、でかすぎません……？」
「大きなったんや！」
化け狐ということだろうか。獰猛な唸り声を発しているそれは、先ほどまでのしおらしい態度など嘘のようだ。射るような目つきで僕らを見ている。初めて体感するがこれは多分、殺気という奴だ。
女性はウエストポーチの中をひっかきまわしている。使えないの道具なのか、ポイポイと地面に捨てて行く様はパニックになったときのネコ型ロボットを彷彿とさせた。
「坊主、ぼさっとしとらんとはよ逃げ」
女性が未だ突っ立っている僕に気付いて声をかけてきた。
でも、無理だ。
「こ、怖くて動けません」
「どアホ！　それでも男か！」
舌打ちされたって動けないものは動けない。正直に言えば、今腰が抜けていないことが奇跡みたいなものだ。僕の足は縫いつけられたように地面から動かない。
「しゃあない。うちが巻き込んだようなもんやしな。ちょっと我慢しぃや！」
言下に女性は僕を後ろに突き飛ばした。五メートルほどよたよたと後退した僕は、気に背中を預けてへたり込んでしまった。
それを確認した彼女は銃のようなもの――のはずだ。銃刀法って

のがあるし——を腰に差し、体を真半身にして右手に特殊警棒を構えた。びしりとそれを狐につきつけた。
「先に言っとく。大人しくうちに捕まるっていう気はないんやな？」
真剣な表情での問いかけが狐に通じるのか疑問だ。通じるとしたら狐語かな？
狐は牙をむいて唸った。女性はやれやれと肩を落とす。
「別にあんたに危害を食わえるつもりはない。ちょっと手当てして人のおらん安全な山奥に連れてくだけや。こんな居心地の悪い場所におんのも不本意やろ？」
狐の金色の目がギラリと光った。牙の間からしゅうしゅうと息のような唸り声が聞こえる。リズムのついたそれは、まるで何かの言葉を喋っているようだ。
「……さよか」
女性はすっと息を吸った。
「うちは梨緒。妖怪退治屋や。この町の町長たちから依頼を受けた。内容はあんたの捕縛。殺すつもりはないけど、あんたが抵抗するなら容赦はせぇへん！」
女性——梨緒さんと狐が動いたのは同時だった。

お互い一歩も引かない攻防だった。
狐は牙をむいて梨緒さんに襲い掛かり梨緒さんは特殊警棒を振りかぶる。
飛びかかってきた狐の下にスライディングのようにもぐりこんだ梨緒さんは、その柔らかな腹を思い切り殴り上げた。
しかし無理な体勢からの攻撃はさほど効果がないらしく、狐はひらりと飛んで距離を取った。
一人と一匹の間にバチバチと火花が飛ぶ様子が見えたような気がした。
狐が再び唸り、身を低くして梨緒さんに飛びかかる。
彼女はポーチの中から取り出したスプレーを構え、狐の目に向か

って思い切り噴射した。
が、狐は器用に身を捻り、それをいとも簡単にかわす。梨緒さんが舌打ちをした。
狐が鋭い牙を剥いた。梨緒さんの目と鼻の先だ。
梨緒さんが再びスプレーを構えた。白い煙は今度こそその金色の瞳に吹きつけられた。
「ギャァァァァ！」
断末魔に似た鳴き声が上がる。
狐が前足を振り回した。その鋭い爪が梨緒さんの右腕をかする。
「やりよったなこのド畜生！」
案外簡単に切れてしまった梨緒さんは左腕に持ち替えた特殊警棒を振りかぶった。振り下ろしたそれは敵の体に一応当たったが、相手はひるまなかった。素早く身を翻すと、尻尾を梨緒さんに叩きつける。その反撃は僕から見えればむしろ気持ちよさそうに見れるけれど案外威力は強かったらしい。被害者は弾き飛ばされ、大きなブナの木に背中から叩きつけられた。ブナの木が身を震わす。僕の手元には、血の付いたスプレー缶が転がってきた。
梨緒さんが低くうめく。手足がぴくぴくと痙攣している。気絶をしているわけではないだろうが、しばらくは動けないだろう。
狐は彼女に見切りをつけたのか、僕のほうを向いた。
獰猛な目が冷たくきらめく。
僕の寿命が音を立てて短くなっていくようだ。　全身の毛穴から冷や汗がどっと吹き出た。
そういえば狐って雑食っていうか肉食だったはず。
食べられちゃうんだろうか、僕は。え、踊り食いされちゃうの？
「ぼ、僕なんか食べたらお腹壊すよー？」
へらへらと笑いながら言うが、狐が反応する素振りはなく、ゆっくりと追いつめるように僕に近付いてくる。
猛獣がぐわりと口を開けた。鋭い牙の並びがはっきりと見える。生臭い息が顔にかかった。目を閉じられなかった。

その時、僕は唐突に閃いた。天啓といってもいい。
僕は無我夢中で手元に転がっていたスプレー缶をひっつかむと、噴出孔がどこを向いているのかも確かめずに指に力を込めた。
天は僕に味方した。
シュウっという音が聞こえる。僕には天使の竪琴にも勝る美しい音色に聞こえた。狐の顔面に向かってスプレーが吹きつけられる。狐も油断したのかスプレーをもろに食らい、悲鳴を上げて逃げて行った。
僕はホッとして目を閉じた。
「やった……！」
全身から力が抜ける。スプレーが地面に転がった。ギリギリだったけど、なんとかピンチを切り抜けられたんだ。
こ、怖かったぁ……
そう思った矢先だった。
「坊主！」
切羽詰まった梨緒さんの声が聞こえた。僕ははっと目を開けた。目の前には先ほどいなくなったはずの狐がいた。その前足でスプレー缶を踏みつけている。そして僕が気付いたことに気付くと、その巨大な足でもって缶をぺしゃんこに踏みつぶしてしまった。
どういうことだ？
僕が呆然としていると、目の前に黄色い牙が並んでいるのが見えた。奥歯が平らになっている草食動物とは違い、肉食動物の歯は尖っているのだと授業で習った記憶がよみがえる。なるほど、目の前に並んでいる歯はみんな鋭く尖っている。
僕の下らない考えが現実逃避というものだとは事がすべて終わってから気付いた。
命の危機に瀕しているのに、僕の心はそれを否定したがっていた。でも死を覚悟していたのも事実で、僕はぎゅっと目を閉じた。
しかし、いくら待っても最期の時は来なかった。

「梨緒、さん……？」
目の前でぽたりと血が滴り落ちる。
「ド阿呆、大人しく食われるつもりか！？」
僕の前に梨緒さんが立っていた。
自分もダメージを食らってふらふらだろうに、僕を守るように。
彼女の右腕には特殊警棒が握られていた。それは狐の中に突っ込まれ、つっかえ棒代わりとなっている。しかし、少々短すぎた。獣の牙が、彼女の腕に食い込んでいる。彼女の腕を鮮血が伝う。
心臓が止まるかと思った。
しかし、彼女は不敵に笑った。
「ま、チャンスが出来たんは上等やな」
彼女は腰に差した銃を左手で引き抜いた。その銃口を眼前の狐に向ける。
「これで終いや」
炭酸飲料の缶を開けたような軽い音がした。赤い房をつけた注射器が狐の鼻に刺さる。い、痛そう。
メリメリと警棒が折れる。思わずひやりとしたが、梨緒さんはとっくに警棒から手を離していた。
狐がゆっくりと倒れる。
僕は今度こそ確信した。
「た、助かったぁ……！」
予想外に自分の声が情けなくて自己嫌悪に陥ったのは内緒だ。

先ほどまで僕を食べようとしていた狐は、今やぐっすりと眠りこんでいるようだった。
「象でも半日は寝てるような強力な麻酔やから、しばらくは寝てるやろ」
そう言って、梨緒さんはやれやれとため息をついた。
ポーチを四苦八苦しながら探っているのを見て、僕は立ちあがった。
「ワイヤーですか？　僕、取り出します」
「頼んだ。ついでに猿ぐつわも」
僕がそれらを見つけ出して渡すと、彼女は顔をしかめながら狐を縛りにかかった。
不思議なことに、先ほどまで巨大だった狐は元のように小さなサイズに戻っていた。突っ込みどころが多すぎて、もはや突っ込む気にもなれない。
それに気になることがある。
「えと、梨緒さん。怪我は大丈夫ですか？」
いきなり名前を呼ぶなんてちょっと馴れ馴れしいかな、と思った。でも僕は彼女の名前しか知らない。
「ん、まあなんとかなるやろ」
彼女はなんてことないように言う。でもその額に浮かんでるのは脂汗という奴じゃないだろうか。
「思ったより手間取ったな。まったく、坊主も人を見かけで判断したらあかんで？」
口をとがらせて言う梨緒さん。
「すいません」
謝っといてなんだが言い訳したい。それ、人じゃないです。
顔をしかめながら梨緒さんは狐を縛る。今度は僕も文句を言った

りしなかった。
「梨緒さん、救急車呼びましょうか？」
先ほどからぽたりぽたりと梨緒さんの腕から滴り落ちる血液は、地面を赤く染めている。見ているだけで気が遠くなりそうだ。
が、本人は至って豪気だ。ウエストポーチに入っていた消毒液を傷口にぶちまけると、しかめっ面で傷口を縛った。
「構わん。車に救急キットあるからこいつ積み込んでから自分で手当てするわ」
「手伝います」
僕が言うと、梨緒さんはちょっと呆れたように笑った。
「お人好しやな」
「もとはと言えば僕のせいですから」
僕は至って真面目に言ったのだが、なぜか梨緒さんはツボに入ったらしくお腹を抱えて笑ったのだった。

ジリジリと日差しに焼かれながら僕は歩く。
「ほら、キリキリ歩かんかい」
「はーい…………」
僕はげっそりしながら歩いていた。梨緒さんは自分の車を高台に止めていた。そのせいで公園を出て約十分、僕は急な坂道をワイヤーでぐるぐる巻きにされた上に丈夫な麻袋に入れられた狐を抱えつつ登っていたのだった。何故か僕より怪我人のはずの梨緒さんの方が元気である。なんでだろう。僕ってもやしっ子？　いや、きっと梨緒さんが丈夫なだけだ。きっとそうに違いない。そうじゃなきゃ情けない。うう。
「ほら、もうすぐや。頂上も見えてきたやろ」
指差された先を見て見れば、なるほど延々と続く斜面は途切れていた。ゆらゆらと立ち上る陽炎のせいで、途切れた先には煮えたぎった釜があるのではないかと考えてしまう。

「ふふ、ふ、綺麗な青空ですね……」
　思わず遠い目をしながら言ってしまえば、梨緒さんが若干引いたのが分かった。駄目だ駄目だ、しっかりしよう。
　深呼吸しようとして開けた口に、突如硬いものが突っ込まれる。
「脱水症状が進みすぎるとさらにやばくなるかもしれんからな」
　梨緒さんは割と真剣な顔で僕の口にミネラルウォーターのペットボトルを突っ込んでいる。
　僕は多少こぼれたが、それでも何とかむせないようにそれを飲みほした。それを確認した梨緒さんは満足したようにうなずいてボトルを取る。
「あ、りがとうございます」
「どーいたしまして」
　僕の謝罪に梨緒さんはどこか誇らしげに言った。
……うん。悪気はない純粋な厚意のようだ。それゆえに文句を言いづらい。
　その後梨緒さんはタオルで僕の顔を拭ってくれた。ちょっと力が強すぎて痛いけど、彼女の厚意だ。ありがたやありがたや。今まで年上の女性と言えば家族ぐらいしか縁がなかったし、母さんはともかく姉ちゃんは僕をよく虐めてきたのでこういうことをされるのはかなり新鮮だ。
　ちょっぴりさっぱりした僕は元気を取り戻し、その後割とすぐに坂を登りきることができた。
　万歳三唱をしたい気分だったが、腕の中には例の狐がいるので止めておく。僕はそれくらい我慢できるのだ。
　梨緒さんの車はそこからすぐの月極駐車場にあった。関係ないけど全国どこに行っても月極の駐車場があるというのだから、きっと月極ってとてもものすごい会社なんだろうなあと見るたびに思う。
　それはさておき、梨緒さんの車だ。
　梨緒さんはどっちかって言うと男勝りな感じがしたからスポーツカーや四駆じゃないかと勝手に想像していたのだが、彼女が近付い

て行くのは可愛らしいミニの車だった。昔映画で盗賊団が金塊奪回のために使ってたのと同じミニ。レモン色のそれはピカピカ輝いていた。近寄って覗きこんでみれば座席には手作りらしきクッションが置いてあり、バックミラーにはお守りがぶら下がっていた。後部座席には色々な箱が積み込まれているが、それでもぱっと見は普通の車に見える。

「坊主、その狐こっちに」

梨緒さんが後部座席のドアを開けながら言う。

僕が近寄って狐を渡すと、彼女はそれをそのまま銀色の箱の中に入れてしまった。一見ケージのように見えるそれには、細かい文様のようなものが刻まれていた。

緊張の面持ちで鍵を閉めた梨緒さんはベルトでそれを固定する。そして大きなため息をついた。

「これで一息つけるな」

その言葉に、今まで彼女が気を張り詰めていたのだと知った。もしかしてずっと僕から離れなかったのも、密かに狐に気を配っていたからだろうか。なんだか申し訳ないような嬉しいような複雑な気分だ。

そんな僕を余所に梨緒さんはトランクから救急セットを取り出している。

僕は手当の手伝いをしようと彼女に近づいた。

そんな僕を見て梨緒さんは困ったような顔をした。

「坊主、気持ちはありがたいけど――」

「僕、手当てなら慣れてます」

梨緒さんの言を遮って僕は言う。

彼女は戸惑っていたようだが、やがて諦めたようにため息をついた。

「なら、頼むわ」

そう言って右腕を差し出した彼女の手当てを僕は始める。

僕が本当に手慣れていたことが分かったんだろう、梨緒さんは目

を丸くしていた。

包帯を巻きながら僕は気になっていたことを尋ねた。

「あの狐って、妖怪ですよね？」

「うん」

梨緒さんは特に迷った様子もなく答えてくれた。

「なんや坊主、妖怪を見るんは初めてやったんか？」

目線を向けられ、僕は首を振った。

「僕は昔、妖怪と暮らしていたことがあるんです」

ことの発端　4（後書き）

タイトル変更しました。

ことの発端　5

僕の結構衝撃ともいえる告白に、梨緒さんはちょっとばかり目を見張った。

だけど、それだけだった。

「さよか」

短く呟くと、梨緒さんはどこか面白そうに目を細めた。それからふっと視線を明後日の方向に向けた。

「最近は妖怪の数も増えてきてるからなぁ。うちの仕事も増えるわ」

僕は首を傾げた。

「梨緒さんの仕事って、なんですか？」

なんて尋ねてはみたけれど、ある程度予想はついていたりする。七つと言わず大量の物騒な道具を持っていたり、妖怪だという巨大狐を捕まえたり。

僕はてっきりその職業は都市伝説かと思っていたんだけど。

「妖怪退治屋や」

そう言って、梨緒さんは誇らしげに胸を張った。傷口が引きつれたらしく、直後に眉をしかめていた。あんまり腕を動かしたら傷に障る。咄嗟に傷口を確認したけど、開いた様子はなく安心してほっと息をついた。

と、

「坊主、人の職業尋ねといてため息つくっちゅうのはどういう了見やねん」

不機嫌顔の梨緒さんが包帯を巻いていない方の手で僕の頬を引っ

張った。
「そういうみじゃないでふ。きずにさわらなかったかなとおもって」
痛い。地味に痛い。しかも喋りづらい。
梨緒さんは僕の言葉を聞くと変な顔をしてから手を離してくれた。
「天然やな」
という謎の言葉とともに。
僕は若干赤くなっているであろうほっぺたをさすりながら梨緒さんを睨んでみたが、なぜか梨緒さんに頭をぽんぽんと撫でられただけだった。

なんとなく分が悪そうなので話題の転換を図る。
「妖怪退治屋って、ホントにあったんですね」
「ああ、そやで。まあ関東やったら本物の退治屋は片手の指くらいしかおらんけどな」
「結構いるんですねぇ」
僕は感嘆した。
というか、関東でそれだけいるのなら全国にはどれくらいいるのだろう。
僕が考えていることが分かったのか、梨緒さんはさらに説明してくれた。
「退治屋は日本全国におることはおんねん。ただ、こっちも商売やからな。仕事が多いとこにまとまっておるから関東と関西は多いっちゅうわけや」
ふむふむ。ということは被害が少ない地域にはあまりいないってことか。
っていうか、被害が多い？
「テレビで数えるくらいなら妖怪被害のこと聞いたことありますけど、ホントにここ数年くらいで数えるくらいですよね。妖怪が確認されたってニュースに出たのだってそれくらいですし」

確か三年ちょっと前に、政府が発表したのだ。人間とも動物とも違う、妖怪という存在がいるのだ、と。

当時のテレビも新聞もインターネットも政府高官の頭がおかしくなったんじゃないかとかなり騒ぎになった。しかしそれもすぐに収まった。みんながみんな、妖怪を自分の目で見ることになったからだ。

一度でも自分の目で妖怪を見た人たちは、妖怪という存在を認識した。二度、三度と見れば、妖怪という存在を受け入れた。

この当時のことを、僕は不思議に思う。

それまで、妖怪というのは普通にいたのだ。それなのにみんな妖怪が見えなかった。妖怪はさりげなくそこかしこに溶け込んでいた。けれど僕がいくら言おうとも友達は妖怪が見えなかったし、信じなかった。

けれども政府が妖怪の事を発表してから、みんなは妖怪が見えるようになった。そして今まで僕のことを散々嘘つきと言っていた子たちも、妖怪をあっさりと受け入れていた。当時は悔しくて悲しくて、こっそり泣いた。

何がどうなってそういうことになったのか、未だに僕には分からない。それを疑問に思う人も、なぜかほとんどいない。

「まぁニュースになるくらいの大規模なんは少ないな。でも小さい被害はあちこちで出てんねん。そりゃもう昔から。でも妖怪って言っても信じる人はおらんかったから、昔は便利屋とか適当な名前を名乗って解決してたてん」

「昔はってことは、今は違うんですか？」

僕の言葉に梨緒さんが複雑そうに笑った。

「今はほとんどの人が妖怪が見えるし、知っとるからな」
思わず苦笑した。
確かにそうだ。昔はカマイタチに転ばされた友達に言っても信じてくれなかったが、今では友達自身が「カマイタチに転ばされた」なんて言うようになっているくらいだから。
ちょうど手当ても終わり、梨緒さんは大きく息をついた。
「坊主、おおきに」
そう言って梨緒さんはにっと笑った。太陽みたいだな、と思う。
「それじゃあうちは撤収するわ。坊主も気ぃつけて帰りや」
ポンポンと頭を叩くと、梨緒さんは車に乗り込もうとした。
僕はほとんど無意識のうちに、彼女のＴシャツの裾を掴んでいた。
「あの、梨緒さん！」
僕が随分と必死な顔だったからか、梨緒さんは目を丸くした。どうした、というように首を傾げる。
緊張して声が震えそうになるのを押さえて、僕は言った。
「僕を、妖怪退治屋で働かせてください！」

梨緒さんは目をぱちくりとさせた。
「坊主、本気か？　っちゅうか、正気か？」
「本気です！」
「暑さに頭やられたとか」
「違います！」
僕が憤然と言うと、梨緒さんは困ったように頭を掻いた。それから腕を組んでうんうんと唸っている。
「働きたいっちゅうても坊主はまだ中学生くらいやろ？　学校はええんか？」
「学校は今夏休みです」
「……そんなんあったなぁ」
梨緒さんは遠い目をした。
大人って夏休み短いもんね。僕のお父さんの夏休みは一週間もなかった。サラリーマンって過酷だ。
僕が一向に引かない様子を見て、梨緒さんも何か思うところがあったのか、僕にしっかりと視線を合わせた。
「なんで坊主はうちで働きたいんや？」
どうやら梨緒さんは僕の話を真剣に聞いてくれるようだ。たったそれだけでもかなり嬉しい。
僕は小さく息を吸った。
「妖怪退治屋で働いていたら、昔の友達に会えるかもって思って」
脳裏によぎるのは、人とは明らかに違った容貌をした友達の顔。
「そいつ、すごく悪戯が好きだったから、もしかしたら妖怪退治屋に依頼が来るかもって思ったんです」
梨緒さんはちょっとばかり眉根を寄せた。
「それが理由か？」
硬い声だった。当然かもしれない。自分でもかなり不純な動機だ

から。
　それでも僕はしっかりとうなずく。
　梨緒さんは顎を撫でながら小首を傾げた。
「九割九分九厘九毛かそれ以上か、ほとんどは坊主の目的とは関係ない仕事やけどええんか？」
　僕は再びうなずいた。
「彼らのこと、もっと知りたいんです」
　その言葉に、梨緒さんは少しだけ目を細めた。
「条件しだいやな」
　なんとなく、嫌な予感がして体がぎくりと強張った。
「条件って、どういうのですか？」
　僕が恐る恐る尋ねると、梨緒さんはやけに無表情で口を開いた。それまで感情豊かな彼女だけに、表情が消えるだけで随分と冷たい印象になる。
「一つ、怪我をしたり死んだりしても自己責任とすること」
　僕はごくりと唾を飲み込んだ。
「二つ、タダで働くこと」
　う、これは普通、かな？　僕中学生だし。お小遣い少ないけど、我慢だ我慢。
「三つ、うちの言うことはしっかり聞くこと」
　僕はこくこくとうなずく。なんてったって僕は素人。プロに従うのは当然だ。
「四つ、これが一番重要や」
　梨緒さんが僕に指をつきつけた。一体なんだろう。
「親御さんに許可を貰ってくること！」
「…………は？」
　僕は思わず首を傾げた。
　梨緒さんは自分でうんうんと満足そうにうなずきながら喋る。
「中学生っちゅうたらまだ義務教育の最中やしな。夏休みやろうが冬休みやろうが、親御さんの許可は必須や。ちゃんと親御さんに一

筆書いてもろたらうちの手伝いしてもええで」

きっとこういうのをどや顔っていうんだろうなぁ。でも僕は諦めが悪いのだ。

「分かりました！　許可貰ってきます。ちょっとだけ待っててください！」

そう宣言した僕はダッシュで家に帰り、たまたま仕事がお休みだった父さんと家事をしていた母さんから一筆書いてもらったのだった。

それを渡した時の梨緒さんは絶句していたけれど。最終的には笑って許可してくれた。

こうして、僕は妖怪退治屋で働くことになったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0137n/

妖怪退治屋とその手下

2010年10月8日14時03分発行